Ⅲ　研究開発

1　地域を担う人材育成のためのプログラム

昨年度、これまでに総合的な学習の時間を中心に進めてきたプログラム「三崎おこし」を「地域デザイン」の観点から見直し、統合、再編、学校設定科目の新設等により効果的な活動へと組み直した。また、これまでは本校の立地上、学校周辺を中心に行ってきた活動を町内全体の活動へと発展させられるよう、研究を進めた。

地域を担う人材育成のためのプログラムでは、「地域資源活用プログラム」、特産品の開発や情報発信などの「課題研究」、外部人材との交流、先進校視察などを行う「県外フィールドワーク・講演会」、「地域理解」という４領域での探究活動を行った。

(1)　地域資源活用プログラム

・ブイアートプロジェクト

海岸の漂着ごみであるブイ（養殖業で使用する直径 30 センチメートルほどのプラスチック製の球体の浮き）をごみではなく資源としてとらえ、アート作品として再利用するとともに、海洋ごみ問題について考えるきっかけにするというものが、ブイアートプロジェクトである。三崎高校の所在地である伊方町は豊かな自然のある町である。瀬戸内海と宇和海の二つの海を同時に見ることができるのは、日本中で伊方町だけであり、生徒たちは美しい海に強い愛着を持っている。しかし、平成 27 年度に地域の人たちと海岸清掃ボランティアを行った際に、多くのごみが漂着しているという実態を目の当たりにした生徒たちは、大きなショックを受けた。全国各地で捨てられたゴミが伊方町の海に漂着してきている、ふるさとの美しい海が、今、危機的状況に陥っている、このままでは、海洋汚染などの自然破壊や、魚介類が獲れなくなるなどの地域資源の衰退などにつながってしまうと考えた生徒たちは、その後も、伝統として海洋ごみ拾いのボランティアを続け、本年度までに５回のごみ拾いボランティアを実施した。生徒たちは海洋ゴミの中でもブイに着目し、ブイアートプロジェクトが始まった。同プロジェクトでは、主にアート作品を制作するとともに海洋ごみに対する啓発活動等を行う「ブイアート活動」と、ブイを使ったアクティビティイベントである「ブイリンピック活動」の二つの活動を行っている。

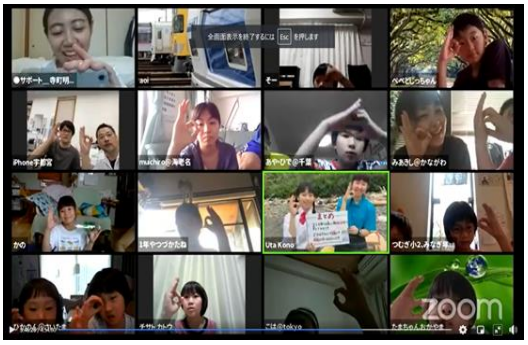
伊方町観光交流拠点施設「佐田岬はなはな」で行われている「はなはな祭り」において、一昨年より「ブイリンピック」を実施しており、子どもから年配の人まで多くの人に親しんでもらい、「はなはな祭り」恒例のイベントとして地元の人を中心に少しずつ定着してきている。しかし、本年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により緊急事態宣言が発令され、「はなはな祭り」自体が中止となってしまったため、ブイリンピックの開催も中止となった。その他にも１年間を通して、地域の各種イベントが中止となってしまったため、３年間地域でのイベントや本校学校行事の中で開催してきたブイリンピックを、本年度は一度も実施することができなかった。来年度も新型コロナウイルス感染症の影響により不透明な部分はあるが、感染症対策を徹底した運営方法を計画するなど、開催に向けた準備をしていきたい。

全国各地の学校が臨時休校になったことや、宣言の解除後もマスク着用や３密の回避、感染拡大地域への移動の制限など、新しい生活様式での行動が求められるようになり、生徒たちは、地域との協働による活動の在り方やその意義を考えるようになった。そのような状況の中で、生徒たちは、今だからこそ自分たちにできる新たな活動はないかと考えた結果、オンラインを活用したブイアート活動を行うことにした。

オンラインでの活動は、接続が不安定になる可能性があるという環境的な不安があったり、その場の状況に応じて内容を微調整することが難しかったりするというデメリットがある。特に、オンライン活動に不慣れな生徒にとっては、負担の大きな活動でもある。その

一方で、時間や費用、場所等の面で大きな負担をかけずに、多くの人に対して一度に自分たちの思いや情報を届けることができるという大きなメリットがある。これまでに多くの協働活動を行い、コンソーシアムの構成員でもある NPO 法人佐田岬ツーリズム協会や NPO 法人さだみさき夢希会から声をかけてもらったこともあり、５月と７月に、ガイアックス主催の「親子オンライン体験フェス」に、10 月に KAZOO 主催の全国連携ブイアートプロジェクトの一環である、「SDGs を学ぼう！おうち de ブイアートコンテスト」という３つのオンラインイベントに参加した。

「親子オンライン体験フェス」は、新型コロナウイルス感染症の影響により、リアルな旅ができない状況が続いている中、オンラインでの観光はできないかというアイデアから生まれたイベントである。オンラインで、その地域ならではの体験をしてもらい、その地域に興味を持っていただくという趣旨に共感し、参加した。「サスティナブル」がこのイベントのテーマであったため、生徒たちは、海洋ごみ問題と漂着物アート体験を題材としたコーナーを企画し、全国の子どもたちに向けて授業を行った。５月の授業では、実際に海洋ごみが漂着している海岸に行き、その場で漂着ごみを拾いブイアートを行った。教師役、小学生の生徒役、撮影係、撮影スタッフなど、すべて生徒たちが役割分担をし、授業シナリオも作成して行った。屋外での実施だったため予想外に風が強かったり、子供たちから思わぬ質問やリクエストが届いたりするなど、大変なことも多かったが、日本中から参加した多くの人たちに楽しんでもらえたことで、生徒たちは大きな達成感を得ることができた。



「SDGs を学ぼう！おうち de ブイアートコンテスト」は、全国各地の海岸に漂着したプラスチックブイを題材とし、海を考えながら、おうちでブイアートに挑戦するという趣旨でイベントが開催された。生徒たちは、SDGs と海洋ゴミの関係性を題材とした授業を行った。このイベントは校内からの中継であったため、担当生徒たちは、各教室や廊下に「14　海の豊かさを守ろう」「15　森の豊かさも守ろう」といった目標に関するブース設置や写真展示を行うことで視覚の工夫をしたり、魚や木を擬人化した劇を取り入れたりするなど、子どもたちが分かりやすく、興味を持って学ぶことのできる授業を考えた。このイベントでは、悪

天候の影響により主催者側の電波状況が悪く、予定の時間になっても始められなかったり、視聴者である子どもたちの声が聞こえづらかったりするというオンライン特有の課題が見られたが、オンラインイベントでのトラブルにどう対処するかという実地経験となり、良い経験になった。

この二つのオンラインイベントに参加したことで、本年度、大きな広がりを見せているオンラインによるイベントを、早い段階で体験することができただけでなく、それをうまく活用する方法を考えることができた。また、日常生活では関わることがなかった全国の子どもたちと、伊方町の現状や全国の海洋ゴミ問題について考えることができたことは本当に貴重な経験になった。

また、愛媛県主催の「愛媛県プラスチック資源循環シンポジウム」において、事例発表を行った。同シンポジウムは、行政職員や大学教授、漁協関係者、ボランティア団体代表など様々な立場の人が基調講演やパネルディスカッションを行うという、海洋プラスチック問題において非常に先進的なシンポジウムである。本校は、その中で唯一の高校生による事例発表を行った。これまでのブイアートプロジェクトの紹介や、本年度新たに取り組んだオンラインでの取組に加え、10 分間のプレゼンテーションの間に実際にブイアートを制作することで、ブイアートと本校の海の豊かさを守る取組についてより分かりやすく周知することができた。シンポジウム終了後には、地元漁業関係者や行政職員の方から、多く励ましの言葉をかけてもらった。また、シンポジウム中に制作したブイアートも好評で、作ったものを譲ってほしいという人も複数名いた。参加した生徒たちは、専門家の研究成果や事例報告を聞き、海洋プラスチック問題についての理解を深めるとともに、自分たちの活動が多くの人に聞いてもらい、認められたことで、これまでの活動に自信を深めることができた。今後もオンライン、オフライン問わずに多くのイベントに参加するなどして、海洋プラスチック問題解決の一助となれるよう取り組んでいくことで地域貢献を行っていきたい。そのためにも、今回知り合うことのできた方々を中心に多くの専門家と協働して、生徒たちの専門性を高められるようにしていきたい。

本年度より開設した学校設定科目「未咲輝学Ⅰ」において、１年生全員がブイアート制作を行った。これまでも、総合的な学習及び探究の時間にブイアート制作を行ってきたが、グループ単位での制作であったり、イベントに使用するための下準備であったりして、学年全員がブイアートを制作したことはなかった。未咲輝Ⅰの初回の授業で、SDGs の概要について説明した後、自分が興味のある目標についてアンケートを実施した結果、最も多くの生徒が興味があると答えたのが、「14　海の豊かさを守ろう」であった。さらに、海の豊かさを守るためにできることについてアンケートを行ったところ、「海洋ごみを拾う」という意見が最も多かった。そこで、このテーマについて探究活動を行う中で、NPO 法人佐田岬ツーリズム協会理事長の宇都宮圭氏を講師として招き、愛媛県のイメージアップキャラクター「みきゃん」のブイアートを一人一つ制作した。制作したブイアートは学校の中庭に飾り付け、文化祭などのイベントで来校者に見てもらうことができた。１年生 56 名の約半数は、学区外から入学した生徒であり、その内 18 名は県外生である。このような生徒たちにとって、伊方町の海洋ごみ問題に対しての知識はほぼ皆無である。しかし、この活動を通して海洋ごみ問題に対する理解を深め、関心を高めることができた。「愛媛県プラスチック資源循環シンポジウム」に参加した４名のうち、１年生は２名であったが、この２名は共に県外生であった。来年度は、地域の小学生や中学生にブイアートを中心とした SDGs や海洋プラスチック問題についての特別授業を行うことで、高校生が中心となった持続可能な地域づくりに取り組んでいきたい。

昨年度までの活動は、漂着ごみであり地域の課題となっているブイを地域資源ととらえ

てアートやアクティビティイベントを実施してきた。本年度は、高校生自身の学びをオンラインも含めた多くのイベントで発信し、場所や年齢を問わずに多くの参加者に海洋ごみ問題に対する問題提起を行うことができた。来年度は、イベントの実施にとどまることなく、ブイアートプロジェクトをきっかけに、マイクロプラスチックなどの海洋ごみの問題や、海の豊かさを守る取組についてもより外部人材と協働して専門的な研究を行うとともに、そのことを外部に発信していくという取組も行っていきたい。地域の小・中学生に対しては対面でのイベントや、実際に漂着ごみが流れ着いている海岸で協働活動を実施することで、海洋ごみ問題に興味・関心を持ってもらえる環境教育の一環とするとともに、郷土愛をより高められる活動にしていきたい。また、本年度は外部団体のオンラインイベントに参加させてもらったが、来年度は本校主催のオンラインイベントを開催するなど、より効果的なオンラインイベントの在り方についても研究し、より多くの人に研究成果を伝えるとともに、SDGs活動の推進を図っていきたい。

(2)　課題研究

課題研究としては、「情報発信」、「イベント」、「特産品開発」という三つの部門を設定した上で、より具体的な七つの研究班を編成した。生徒は、自らが興味のある研究班に所属し、探究活動を行った。

①　情報発信部門

情報発信部門は、「アート」、「情報・防災」の二つの班に分かれて活動した。

三崎港周辺の地区は、どの場所からも海が見える非常に景色の美しい場所であったが、東日本大震災以降、津波への対策として、高さ 2.5 メートル、長さ 190 メートルほどの防潮堤が設置され、海を見ることができなくなってしまった。地域住民からも「味気なく、寂しい感じがする」という声が上がっていた。そこで、アート活動で地域を盛り上げるために防潮堤に絵を描くことを計画した。アート班の生徒が原案を作成し、地域住民にも愛着を持ってもらうために地域の人たちと協働してアート作品を制作することにした。当初は、オープンイベントとして多くの人に自由に参加してもらう予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、感染対策として、地元の三崎保育所、三崎小学校、三崎中学校に限定して案内をし、事前申し込みのあった園児・児童・生徒のみを対象として「MAP（みさきアートプロジェクト）」を実施した。当日までの準備として、防潮堤の表面を清掃し、下地となるシーラーの塗り付けを行った。その後、下書きと当日のスムーズな運営のために、塗る色の番号振り分けなどを行った。イベント当日は、小学校・保育所・中学校で作業時間を分け、密にならないように注意しながら活動を行った。約 30 名の地域の子どもたちに参加してもらい、防潮堤の 20 メートルほどの長さの部分に絵を描くことができた。今後は、防潮堤の残りの部分にもアート作品を制作していきたいと考えている。本年度の MAP は初めての取組であったため、スムーズな運営ができなかった部分はあったので、来年度はその反省を生

かしたい。また、より多くの人が気軽に参加できるブイアート活動の実施方法や、外部の芸術家と協働して防潮堤ごとにテーマを設定した壁画の制作についても研究していく予定である。

本校は災害時の緊急避難場所となっており、地域の防災拠点としての役割を担っているため、情報・防災班は、防災意識啓発 RPG の開発と地域連携避難訓練の実施に取り組んだ。

当初は、防災情報を発信するアプリの開発に取り組んでいたが、学校設備では開発に難しい面があったため、予定を変更して防災意識啓発 RPG を作成することになった。三崎地区の地形を題材に、災害発生時に適切な行動を取り、命を守るための知識を身に付けることができるようになるゲームの作成を目指して開発に取り組んでいる。本校では、プログラミングの授業等を開講していないため、生徒たちは試行錯誤しながら活動に取り組んでいる。現在、作成途中であるが、今後 RPG を完成させ、多くの人に親しんでもらえるよう、普及活動を行っていく予定である。

地域連携避難訓では、地域の保育所、小学校、中学校と連携して合同の避難訓練を行った。それぞれの施設から、地域の緊急避難場所に指定されている本校に避難してもらい、そのサポートや避難誘導を本校生が行った。また、本校生が要救助者役として車いすに乗り、他の生徒が避難させるという訓練も行った。さらに、商品開発班の生徒が開発した、非常食である簡易みそ汁の素「みそボール」を試食してもらった。来年度以降も、地域と連携した避難訓練の実施や、防災情報の発信を行っていく予定である。

② イベント

イベント部門は、「イベント」、「カフェ」の二つの班に分かれて活動した。

イベント班は、「みさこうたいそう 115」の普及と、昨年度から実施している文化祭での愛媛大学ダンス部との合同創作ダンスの実施に取り組んだ。昨年度までは、地域の大きな行事である「はなはな祭り」や保育所や高齢者介護施設等において「みさこうたいそう 115」

を実施させてもらっていたが、本年度は、新型コロナウイルス感染症の流行により、それらの行事が中止になり、活動に苦労した。その中で、リアルなイベントとして開催できた「みさこうフェスティバル」の中で、一部振り付けを変え、接触しない形で体操を実施したり、本年度新たに取り組んだオンラインイベントの中で実施したりするなど、新たな形での実施を模索した。

愛媛大学ダンス部との合同ダンスにおいては、イベント班の生徒が中心となって一般の生徒にも参加を募って実施した。愛媛大学ダンス部との合同練習だけではなく、イベント班の生徒がリーダーシップを発揮して本校生だけでの練習も行い、ダンスを完成させた。文化祭当日には、大勢の人に見てもらい、大好評を博した。３月には、地域の温泉施設である亀ヶ池温泉で、愛媛大学主催の「踊る！亀ヶ池温泉」というイベントに参加し、愛媛大学ダンス部と合同ダンスを披露する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響によりイベントが中止となってしまった。来年度も愛媛大学ダンス部とは協働活動を行っていく予定であるので、本校文化祭での合同ダンスの実施はもちろん、「踊る！亀ヶ池温泉」が実施される場合には、地域の人に笑顔を届けることのできる合同ダンスを披露できるようにしたい。

来年度以降も、各種地域行事や、小・中学校の行事等と連携して「みさこうたいそう 115」を通した健康普及活動等を行っていく予定である

カフェ班は、本校卒業生でもある地元レストランのオーナーと協働して、高校生カフェである「みさこう Café」の運営に取り組んだ。生徒たちには、地域の美しい海をアピールしたいという思いがあり、地域の海水から塩を精製し、その塩を使って商品開発班とも連携し、「生どら焼き」と「フレンチトースト」というカフェメニューを開発した。商品の製作はもちろん、接客マナーについてもオーナーに指導してもらい、９月にカフェをオープンさせた。10 月には、校内にあるヤマモモの実を使って１年生が開発した「ヤマモモジャム」をトッピングに使用したアイスクリームを販売し、大勢の人に来店してもらった。毎月新メニューを開発し、月１回の開店を目指して活動していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、11 月、12 月は開店を見合わせた。１月には感染防止対策を徹底しながら伊方町民限定で再オープンした。今後も感染防止に留意しながら、毎月のオープン及び新メニューの開発に取り組んでいきたい。

③　特産品開発

特産品開発部門は、「商品開発」、「ツアー」の二つの班に分かれて活動した。

商品開発班は、「みそボール」やカフェメニューの開発の他に、オンラインイベントにおける柑橘のアロマサシェ製作のワークショップや、地元の食材を使った保存食の開発にも取り組んだ。また、一年生を中心として校庭のヤマモモの実を使用したジャムの開発や裂織りの商品開発にも取り組んだ。商品開発班は、地域資源を活用して新たな価値を創造することを目標として商品開発に取り組んでいる。今年度、研究開発を行った素材も、海水や野菜、魚、柑橘などといった、地元では「当たり前」のものばかりである。しかし、高校生のアイデアや外部人材との協働により新たな価値を付加することで、多くの人に喜んでもらえる商品を開発することができた。今後も、この理念を大切にしながら、商品一つ一つの完成度を高め、実際の販売を目指して研究を続けていく予定である。

ツアー班は、伊方町の魅力を多くの人に伝えるためのツアーイベントの企画・実行を目標に活動している。本年度は、魅力発信ガイドブック及び動画の作成に取り組んだ。高校生目線のガイドブックを作成するため、取材先の選定や、取材交渉、原稿作成などの作成過程をすべて生徒自身が担当した。本年度は、三崎地区の商店やグルメについてのまとめを行った。現在、生徒たちは編集活動を行っており、３学期中には冊子が完成する予定である。来年度以降も、今回取り扱っていない内容や町内の他地域の内容について取材を行い、継続して冊子を発行していく予定である。動画については、地元グルメ紹介動画とサイクリング動画の２本の動画を作成した。地元グルメ紹介動画は文化祭で披露し、サイクリング動画は本校のフェイスブックページに掲載することで、多くの人に視聴してもらった。さらに、サイクリング動画については「佐田岬ワンダービューコンペティション 2020」に応募し、上位 20 作品にノミネートされた。来年度は、ガイドブック第２弾の作成と、作成したガイドブ

ックを活用したツアーの実施を予定している。

④　せんたん部

せんたん部とは、地域活性化に取り組む有志のグループであり、これまでに地域活性化シンポジウム「せんたんミーティング」の開催や、地域 PR 映画「せんたんビギンズ」の作成などを行ってきた。せんたん部とういう名前には、「四国最西端の高校から最先端の取組を行う」という思いが込められている。本年度は、マーマレード作り、「#allwecando」プロジェクト、オンラインフェスティバルへの参加、各種イベントに参加してのプレゼンテーションなどを行った。

三崎高校の中庭には、かつて三崎地区の重要な特産品であった「だいだい」の木が４本植えられている。現在、伊方町の柑橘の主力品種は、清見タンゴールや、デコポン、紅まどんななどであり、だいだいを生産している農家はほとんどない。本校のだいだいも、地元農家の人に寄贈してもらった貴重なものである。しかし、だいだいは酸味の強い柑橘であるため、これまではその実は食べられることも、活用されることもほとんどなく廃棄してきた。これまでも、このだいだいの実を活用できないかという意見も出たが、決定的な案がなく、活用できずにいた。

昨年度、隣の市である八幡浜市でマーマレードの世界大会、「ダルメイン世界マーマレードアワード＆フェスティバル」が開催されることを知り、これをきっかけに地域の新しい特産品を生みだしたいと考えたせんたん部の生徒たちは、マーマレード作りに挑戦した。試行錯誤を繰り返しながら、三崎産のはちみつを加えることで、酸味と甘みのバランスの取れたマーマレードを作成することができた。保護者に分けてもらった清見タンゴールをブレンドしたものも作り、４種類のマーマレードを作り、銀賞１、銅賞２という結果だった。今年度のアワードでの金賞を目指して、過去のアワードで金賞を受賞した講師による講習会に参加したり、昨年度の清見タンゴールに加え、「甘平」や「せとか」など、地域で栽培されている様々な柑橘類との組み合わせを試したりするなどして研究を重ね、校庭のだいだいをベースに新たに７種類のマーマレードを作り、ダルメイン世界マーマレードアワード＆フェスティバルに出品した。しかし、本年度のアワードは、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、残念ながら中止となってしまった。出品したマーマレードは、出品感謝状とともに返送されてきた。金賞を目指していた生徒たちにとっては残念な結果となってしまったが、八幡浜市で行われる大会は来年度が最後となるため、本年度は、JA の営農指導員や地元農家の人と協働して、これまで手付かずだった、だいだいの木の手入れを行うなど地道な活動を続けており、金賞獲得に向けて研究を続けている。

金賞獲得後は、「高校生がレシピを考案した世界大会金賞マーマレード」というブランドを生かすことはもちろん、金賞を獲得できなかった場合もこれまで２年間の研究を生かし、地域の企業と協働して生産・販売をしてもらうシステムを作ることが最終目標である。そう

することで、地域の新しい産業作り、地域の活性化につなげていきたい。

緊急事態宣言下の臨時休業期間中、生徒たちは、「リアルなイベントの開催が難しくなった今、本当に『私たちができること』は何なのか」ということを考えた。その結果、自分たちにできることは、一人でも多くの人に感染予防に努めてもらえるよう働きかけることであると考えた。そこで、新型コロナウイルス感染症予防のためのアクション（「不要不急の外出の自粛」「換気の徹底」「規則正しい生活を心掛ける」「手洗い・うがいの徹底」「マスク着用」）をせんたん部のメンバーが実践した動画をリモートで撮影し、本校の SNS（Facebook・YouTube）で「#allwecando」のハッシュタグを付けて発信した。この動画は多くの人々に観てもらうことで、新型コロナウイルス感染症への感染予防策実行を喚起することにつながった。

さらに、本校の動画の趣旨に共感した愛媛県内外の高校生や大学生から、「ぜひ、自分たちも協力させてほしい」という申し出があった。これまで地域との協働活動等で関りのあった、長浜高等学校や宇和高等学校三瓶分校などの県内の小規模校から、県外の私立高校である福岡県の雙葉高等学校、そして、本校の卒業生でもある大阪大学や愛媛大学の学生までもが、それぞれの「今できること」を撮影した動画を「#allwecando」のハッシュタグを付けて発信してくれた。この活動は多くのメディアでも取り上げられた。

もちろんこの活動の目的は、新型コロナウイルス感染症を予防することにあるが、この活動を通して、改めてオンライン活動の可能性の高さを感じた。コロナ禍の中で、あらゆることに自粛のムードが漂っているが、ICT 機器を上手く活用すれば、高校生でも、どこからでも、日本や世界に働きかけることができる。「#allwecando」の活動は、そのようなオンラインの可能性を示してくれた。この活動をきっかけに、本校では、オンラインとオフラインを組み合わせた新しい地域おこしの活動を進めていくことになった。

５月と７月に、ガイアックス主催の「親子オンライン体験フェス」に、10 月に KAZOO 主催の全国連携ブイアートプロジェクトの一環である、「SDGs を学ぼう！おうち de ブイアートコンテスト」に参加してオンラインによるブイアートワークショップや模擬授業を行った。これまで生徒たちが行ってきたオンラインでの取組は、動画を作成して学校の facebook で発信するというものであった。今回のオンラインイベントは、リアルタイムでの配信ということで、オンライン特有のトラブルもあったが、経験して初めてわかることも多く、生徒にとっては良い経験になった。また、自分たちの予想よりもはるかに多くの人が日本中からプログラムに参加し、こちらの投げかけに画面を通して反応してくれていることが、生徒にとって励みになっていた。また、実際に行ってみることで、オンラインの強みである即時性や広範性というものも実感することができていた。オンラインイベントを活用し、イベント終了後には、参加生徒から「日本中や世界中の人とつながり、伊方町の魅力を発信していきたいし、その手ごたえをつかむことができた。」という感想が聞かれた。これらの経験を活かし、来年度は、せんたん部が主体となって多くの人に喜んでもらうことのできるオンライ

ンイベントの運営にも取り組みたいと考えている。また、本校の強みであるリアルなイベントと新たな取組であるオンラインイベントの、より効果的な融合についても研究していくことで、より柔軟な探究活動を行っていきたい。

11 月には、本年度の本校における地域との協働事業をせんたん部の生徒がまとめ、えひめ地域政策研究センター主催の「えひめ地域づくりアワード・ユース 2020」に応募した。

本年度は、その他にも、まち歩きガイドの実施や、サイクリングコースの開発、三崎製錬所跡の研究などの地域活性化プランの作成等を行っていく予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、実施を見送った活動もある。また、多くの１年生が入学したこともあり、各研究班での探究活動が例年以上の深まりを見せていることもあり、まち歩きガイドやサイクリングコースの開発はツアー班の活動として独立させたり、地域活性化プラン作成プログラムを１年生の活動に組み込んだりすることで、学校全体で、よりバランスの取れた活動を行うことができた。

せんたん部は、様々な企画の立案や運営、事例発表を行うなど、本校の地域との協働活動におけるシンボルともいえる存在である。しかし、せんたん部として活動する生徒には、これまで大きな行事の企画・運営を行ったことがなかったり、人前での発表に苦手意識を持っていたりしている生徒も少なくない。せんたん部はその活動内容から、他の班の生徒よりも外部の人と関わることや、校内外を問わず話し合いをする機会が多い。そのため、企画力やコミュニケーション能力などの力が、日々の他者との協働活動を通して自然と伸長していると考えられる。今後は、せんたん部の事例をモデルケースにし、他の研究班における活動はもちろん、教科の授業や学校行事等においてもこのような「他者との協働活動による生徒の成長」を、より推進していくことができるよう、カリキュラム開発等の研究を進めていきたい。

以上のように、各研究班における研究活動が、本事業の探究的な学びの中心となる活動である。本校は、伊方町外から入学してきた生徒や、中学校時代につまずきを経験している生徒など、多様な生徒が在籍している。入学時には、伊方町への関心や愛着が低い生徒や、各班 10 人程度の少人数の班とはいえ、班活動や他者との協働を伴う探究活動を苦手としている生徒も少なくない。しかし、このような研究活動を通じて生徒は大きな成長を遂げ、伊方町への愛着を高め、探究活動に意欲的に取り組んだり、人前で堂々と発表したりすることができるようになっている。個別最適化された学びの提供という観点からも、生徒一人一人がさらに意欲的に研究に取り組むことができるプログラムの開発に、来年度も取り組んでいきたい。

(3)　県外フィールドワーク

県外フィールドワークとして、８月に、宮崎県立飯野高等学校に、12 月に島根県立隠岐島前高等学校に視察研修に訪れるよう計画していたが、８月には視察直前になり、宮崎県での新型コロナウイルス感染者数が急増化したことを受け、視察を延期することとなった。その後の全国規模での感染者増により、12 月に予定していた隠岐島前高等学校の視察も含め、本年度の県外視察研修は、生徒の安全面などを考慮して中止とした。

その、代替えとして、２月 19 日、20 日に飯野高等学校の主催でオンライン開催により行われた「全国グローカルリーダーズ summit」に、せんたん部の生徒６名が参加した。

19 日には、飯野高等学校の地域探究活動や、地域支援活動の研究調査を聞き、意見交換を行った。飯野高等学校におけるコースごとの取組や、地域に根差した活動などは本校にとっても参考になることが多く、生徒たちは学びを深めていた。

20 日には、本校も事例発表も行い、全国から参加した高校生及び教育関係者に対して、「みさこう・せんたんプロジェクト」における取組を紹介することができた。発表後には、「各研究班の研究テーマはどのように決めているのか」、「複数の班に所属して活動している生徒はいるのか」といった質問を受け、せんたん部の生徒たちが、本校の探究活動の具体的な進め方や実施体制などについて説明していた。アイスブレイク開始時には、やや緊張していた生徒もいたが、すぐに打ち解け、事例発表や質疑応答もスムーズに進めることができた。また、休憩後に行われた「未来カフェ」では、全国の高校生や大人たちと活発に話し合いを進めることができていた。

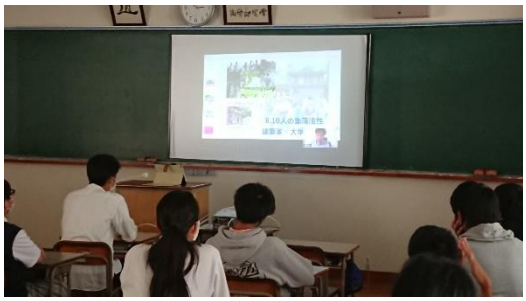
オンラインでの開催ということもあり、対面での活動とは異なる点もあったが、他校の事例発表を聞いたり、多くの高校生たちと交流したりすることで、生徒たちは大きな刺激を受けるとともに、思考力や判断力、コミュニケーション力などの力を育成することができた。特に、事例発表後の質疑応答や未来カフェのような台本のない活動というものは、生徒にとっては大きな成長のきっかけになるものであり、オンラインにおいても対面での活動と同じだけの効果が得られると感じた。

本校では、これまで３年間行ってきていた「せんたんミーティング」を、新型コロナウイルス感染症の拡大により本年度の開催は中止した。生徒とともにオンラインでの開催も検討したが、「せんたんミーティング」は、初代せんたん部の生徒たちの、「もっと伊方町や三崎高校のことを全国の人に知ってほしい。そのためには、まず、伊方町に来てほしい」、「もっと全国の人たちの取組を知りたい」という思いからスタートしている。そのため、これまでの開催では、必ず三崎高校生による「まち歩き」を実施してきた。生徒たちはそのような理念を受け継ぎ、「やはり、せんたんミーティングは伊方町に来てもらって実施したい」という思いから、オンラインでの開催を見送った。しかし、今回、「全国グローカルリーダーズ summit」に参加することで、教育的効果を高められる分野も少なくないことを実感するとともに、新たなネットワークを築くこともできたため、「せんたんミーティング」は対面でのイベントとしながら、「せんたんミーティング」とは異なるオンラインイベントの実施についても、積極的に検討していきたい。

(4)　地域おこし講演会

９月には、濵田企画事務所代表であり、これまで本校の探究活動において協働してきた濵田竜也氏を講師として招き、１年生を対象に「探究活動の進め方」というテーマで地域おこし講演会を行った。当初は、対面での講演会を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、オンラインでの実施となった。１年生は、年度当初の休校措置を受け、探究活動のスタートが例年よりもずれ込んでしまった。そこで、11 月のまとめに向けて探究活動を進めら

れるようになるために企画した。本校のプロジェクト学習を含め、全国各地の高等学校や行政等と連携して地域活性化プロジェクトに取り組んでいる濵田氏から、プロジェクトの進め方について概要を説明してもらうとともに、1年生が実際に取り組んでいるプロジェクトを実例として、多角的な視点からの助言をもらうことで、生徒たちには新たな気付きが多くあり、その後の探究活動をスムーズに進めることができた。質疑応答の時間では、プロジェクトを進めていく上での課題の解決方法や、より良いプロジェクトチームの作り方など様々な質問が行われ、活発に活動が行われた。この講演でのアドバイスも生かしながら探究活動を進め、11月に行われた本校文化祭では、すべての研究チームが研究成果ポスターを発表し、校内関係者はもちろん、来校した地域の人たちにも広く研究成果を発表することができた。また、その後も研究を続け、2・3年生の研究班の活動と協働するチームや自分たちのプロジェクトをビジネスコンテストに応募するチームが複数現れるなど、1年生段階での探究活動の深まりが強く感じられた。

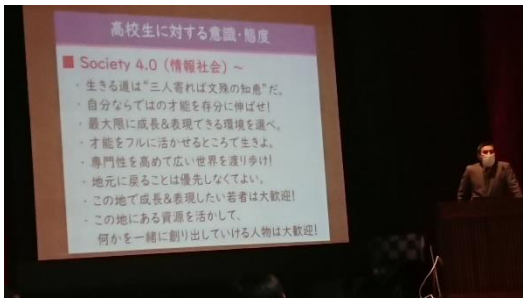


2月 16 日に行われた、総合的な学習及び探究の時間における成果発表会「未咲輝-SENTAN-発表会」において、全学年及び本校教職員、運営指導委員会委員及びコンソーシアム構成メンバーを対象に、大正大学地域創生学部　浦崎太郎教授による講演会を実施した。

「個別最適な学び」をすべての生徒に届けるためには、地域との協働が必要不可欠であり、学校のカリキュラムにおいてその中心となるのが「総合的な探究の時間」である。現在は、まさに「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」へのアップグレードが求められている時期である。浦崎教授からは、島根県立吉賀高等学校や島根県立益田高等学校、広島県立因島高等学校などの取組などを中心に、「総合的な学習の時間」と「総合的な探究の時間」の特筆的な相違点、地域探究を生かした進路実現の在り方、「Society2.0」の社会と「Society4.0」の社会において、高校生に求められている資質・能力や、高校生に対する社会からの要求など、地域協働学習や探究学習における最先端であり、核心的部分でもある内容について講演していただいた。

生徒にとっては、自分たちの地域協働活動や探究活動を実施する上で必要不可欠である知識や、情報社会である「Society4.0」の社会において求められている力がどのようなものであるのか、ということについて知ることのできる貴重な時間となった。本校の「総合的な学習の時間」及び「総合的な探究の時間」は、実践活動を主としたカリキュラムとなっており、「経験から学ぶ」という意味合いが強い。地域協働活動や探究活動において基礎となる知識や、必要とされる手法については、本年度から設置した学校設定科目「未咲輝学Ⅰ～Ⅲ」において、3年間かけて身に付けるというカリキュラムを編成している。しかし、本年度は「未咲輝学」設置1年目ということもあり、生徒の知識や探究活動に対する考え方が発展途上の面も見られた。しかし、今回の講演を通して、生徒たちは探究活動の本質に触れることができ、来年度以降の活動をより深化させていくための基礎部分を確立するための良い機会になったと感じている。

また、教職員にとっても、地域協働活動や探究活動を通して今後生徒に身に付けさせるべき力を明確に提示してもらうことで、より効果的な指導を行っていくための指針になったと考えている。地域との協働による活動を実施していく上で、活動の活発化に比例して負担が増加しているということが本校の最も大きな課題として挙げられる。今回の講演の中であった、「自分事としての個別最適な学びと地域課題発見・解決に向けた活動を掛け合わせることで新たな価値を創造し、自分らしく社会に参加する」、「自分らしく社会に参加することが高校教育改革の本流である」、「生徒の知的欲求に立脚した自走性を高めることで、負担感を減らしながら、持続可能な探究のサイクルを作ることができる」という考え方は本校の課題解決に向けた手掛かりになると感じた。本校の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定は来年度で最終年度になるが、その先にも持続的に続いていく探究システムを構築するためにも、さらなるカリキュラムの研究を進めたい。



２月 17 日、24 日に専修大学商学部大崎恒次准教授及び大崎ゼミの大学生とのオンライン交流会を行った。当初は、本校に来校してもらい講演会及び交流活動を実施する予定であったが、やはり、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響を受け、感染拡大防止の観点からオンラインでの交流となった。

17 日には、専修大学大崎ゼミの学生と本校各研究班による事例発表を行った。

大崎ゼミの学生は、愛媛県出身者ではないものの、伊方町や本校の取組に興味を持ち卒業論文のテーマとして設定し、研究を行っており、その研究成果についての発表を行った。大学生のプランは、総務省のデータを用いてそこから課題を抽出したり、「高大連携を用いて地域創生モデルを作成する」という明確な研究目的を設定し、実現のための情報収集や分析を行ったりするなど、学術的な研究がなされており、高校生の研究よりも具体性や説得力が強く感じられる内容であった。また、本校の生徒にとって、町外、しかも東京という大都会に住む大学生たちがどのような観点で伊方町や本校のことをとらえているのか、という貴重な意見を聞くことができ、刺激を受けていた。

本校生は、前日に行われた「未咲輝-SENTAN-発表会」での発表を基に、研究班ごとに事例発表を行った。本校生は、普段の生活において大学生と接する機会はほとんどなく、長期休暇中などに帰省した卒業生である大学生と接する程度であり、大学生の研究発表を聞いたり、自分たちの研究に大学生からアドバイスをしてもらったりする機会は稀である。そのため、大学生からアドバイスを受けたり、自分たちの活動に興味を持ってもらい褒められたりするということに喜びを感じるとともに、より良い活動を行いたいという「自走性」を高めるきっかけともなっていた。

24 日には、17 日の事例発表を基に、それぞれの研究班に対して大学生に一人ずつついてもらい、意見交換を行った。都会の若者のニーズや、ライフスタイルなど、普段知ることのできない内容について質問させてもらい、来年度の探究活動における新たな視点を取り入れることができた。また、大学生活そのものに対して興味・関心を持った生徒も多く、大学進学を考え

ている生徒にとっては貴重な機会となっていた。専修大学大崎ゼミとは、来年度以降も定期的に連携した活動を行っていく予定である。これまで本校は、愛媛大学ダンス部と協働してダンスを軸とした健康なまちづくり活動に取り組んできた。新たに、専修大学とも協働することにより活動の幅を広げるとともに、本校がハブとなることで、新たなコンソーシアムの形成を目指して活動していきたい。

本校の生徒は、地理的に他校生や外部人材との交流が難しい状況にある。そのため、このような機会に多くの人と交流することは、非常に貴重な機会であり、交流から刺激を受け新たな気付きを得る生徒は多い。このような外部の人との交流の中で、新しい知識を得たり、意見交換をしたりすることによる学びの効果は大きい。また、そうすることで、自分たちの地域や自分たちの活動を客観的視点から見つめ直すことにもつながっており、自己評価・改善のプロセスとなっている。本年度はコロナ禍の影響により、多くの学校・機関でオンラインの取組が加速している。また、このような状況だからこそ、高校生のオンライン活用スキルや探究活動の進捗具合にも大きな差が生まれている。これまでは学校の立地状況により教育資源に格差が生まれていた面もあった。しかし、オンラインを効果的に使うことで都市から離れた地域にある学校においても、格差を減少させることができる。地域にある高校の新たな教育資源として、オンラインによる講演会や交流会などのシステム作りやネットワーク作りにも取り組んでいきたい。

(5)　地域理解

１年生を対象に、「未咲輝学Ⅰ」の授業において、伊方町の文化財保護委員会委員長でもあるカリキュラム開発専門家の黒川信義氏の協力を受け、地域理解活動を行った。10 月には、文化財研究のための拓本技術を身に付けるための実習を行った。まず、１時間かけて拓本の文化的意義やその実施方法などについての講義を受けた。また、実際に黒川氏が実施した拓本の実物を紹介してもらったり、自分が使う道具を作ったりすることで拓本への興味・関心を高めた。次の１時間で校内のマンホールを使っての実地研修を行った。生徒たちは、当然全員が拓本実習が初めてであり、風に吹かれて用紙があおられたり、絵の具を付けすぎて、紙が破れたりするなどの苦労もあったが、全員が拓本を制作することができた。来年度は、実際に地域の石碑等の拓本を行ったり、その拓本を教材に国語科の授業において解釈を行ったり、地理・歴史科の授業において各年代における資料として活用したりするといった教科横断型の取組を行いたいと考えている。

11 月には、黒川氏と運営指導委員会の委員でもある町見郷土館館長の高嶋賢二氏の案内で、三崎地区に遺る赤坂坊山石塔群の実地研修を行った。同石塔群は中世ごろに建造されたと言われており、その原材料の石は、九州や中国地方など様々な地域から産出されたものであり、当時三崎地区が海上交通の要所となっていたことを示す貴重な手掛かりとなっている。今回の調査では、黒川氏、高嶋氏の指導の下、磁石を用いて「よく付く石材」「僅かに付く石材」「全く付かない石材」に分類し、石塔の岩相と石材サンプル写真とを比較して、「凝灰岩」「安山岩類」「花崗岩類」のいずれに当たるかという調査を行った。実習結果データを分析した結果、８割以上が正解であったことなどから、生徒たちがある程度の理解力・観察力を高められたと感じられた。また、赤坂坊山周辺の地形（海岸段丘と石塔群の関係）や、松森城址、三崎水軍などの説明にも興味を持つ生徒も一定数見られ、地域の歴史や文化への関心の高まりも感じられた。

２月には、町見郷土館を訪問し、高嶋氏より展示物の説明や佐田岬半島の昔の生活についての解説をしてもらった。県外生はもちろん、地元の生徒にとっても見慣れない道具や聞きなれない話が多く、興味を持ったようであった。また、佐田岬半島の歴史や文化、昔の暮らしなどについて強い関心を持った生徒もおり、そのような分野の探究活動を行いたいという感想も聞かれたため、来年度、歴史分野における探究活動の実施に向けて、黒川氏や高嶋氏と協働しながら新たな仕組みづくりを行うとともに、来年度の「未咲輝学Ⅰ」におけるカリキュラムにフィードバックし、より良い実践内容を研究したい。

他地域からの入学生が年々増加傾向にある本校にとって、1年生の段階でこのような地域理解活動を行うことは、その後の3年間の地域との協働活動における基礎となる。本年度は、黒川氏や高嶋氏のような地域人材と協働した活動を行うことで、昨年度までの地域理解活動と比較して、より専門的な見地からの地域理解活動を行うことができた。その要因として、「未咲輝学Ⅰ」という学校設定科目を新たに設置し、体系的に学習活動を行ったことが大きいと考えられる。今年度の実施内容を基に、生徒が、より主体的に地域理解を進めることができるよう、親和性の高いカリキュラム開発に取り組みたい。

2　集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム

伊方町は、日本一細長い佐田岬半島に位置しており、東西 40 キロメートルほどの中に、およそ 40 の集落が点在している。そのため、現在でも集落ごとに独自の文化が残っている反面、多くの集落で若者の流出による過疎化が進んでおり、伝統行事や文化の継承が難しくなっているという課題も抱えている。それらの集落の活性化なくして、町全体の活性化にはつながらないと考え、「集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム」に取り組むことにした。しかし、それぞれの集落の持つ魅力や抱える課題はそれぞれである。そのため、各集落に合わせたプログラムの作成が必要であると考え、昨年度はその第1回目として2月 15 日、16 日に、旧瀬戸町大久地区で、地区を一つの舞台と見立て、アート班を中心に地区内をアート作品で彩り、第1幕から第4幕までの四つのプログラムで編成した各研究班の合同イベントとなる「せんたん劇場」を開催した。2日間、4幕のプログラムで地域の人を中心に、延べ 350 名程度の参加があった。生徒たちからは、振り返りの中で、「想像よりも多くの人が参加してくれてうれしかった」、「地域の人と一緒に活動できて楽しかった」、「準備に時間がかかってしまったので、次は計画の段階からもっと練りこみたい」、「他の地区でもこのようなイベントを行いたい」という意見が見られた。本事業の目的として「ブーメラン人材の育成」を、目標としてこれからの時代をたくましく生き抜く力と郷土愛の醸成ということを設定している。地域の集落の中に入り、地域の人たちと共に活動することは、生徒にとって負担となる部分もあるが、それ以上に得られるものが多く、本事業における目的・目標を達成するためには不可欠であると感じた。また、地域との協働という観点からも課題研究の成果を広く地域に発信し、評価してもらう良い機会になると考え、本年度は、伊方地区での開催に向けてプログラムを計画していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、中止となった。来年度は、感染症の状況を踏まえながらオンラインの活用も含めて、実施に向けた計画を立てていきたい。

本年度は、三崎地区に伝わる伝統文化である「裂織り」の継承と商品開発、「裂織り」を活用したビジネスプランの研究による集落等コミュニティの課題解決（文化の継承と産業振興による地域活性化）に取り組んだ。裂織りは佐田岬半島の伝統的な織物であり、各家庭で作られていたが、現在では保存会の人たちが制作しているだけになってしまっている。その保存会の

メンバーも高齢の人ばかりであり、存続が危ぶまれる状況になってしまっている。そこで、本校でも６年前から不定期にではあるが、総合的な学習の時間や家庭科の授業において、裂織りの体験活動に取り組んできた。特に、２年前に保存会会長の孫が入学してからは、本格的に裂織りの研究活動に取り組んできた。該当生徒を中心に探究活動を続け、昨年度はモデルのローラと協働して「裂織りのシュシュ」を開発し、「せんたん劇場」などで販売した。それらの研究を基に、本生徒が中心となって本年度ビジネスプランを作成して「EGF キャンパスアワード 2020－2021」に応募し、第２位となる優秀賞を獲得した。また、１年生にも裂織りについての探究活動を行っていたグループもあったため、本生徒が１年生の活動もサポートした。１年生も独自のビジネスプランを作成し、「第１回八幡浜ソーシャルビジネスチャレンジコンペ」に応募し、１次審査を通過した（２次審査は３月 20 日に開催予定）。このように、本校において裂織りの研究が継続的に行われるようになっており、来年度の「未咲輝学Ⅲ」の授業における起業家育成分野での学習と協働して、ビジネスプランを実現できるように計画していく予定である。

３　各教科・科目における取組

基本的には、全学年同時間に学年縦割りで開講されている総合的な学習及び探究の時間（１単位）を中心に、地域との協働による探究的な学習を実施している。また、今年度より学校設定科目「未咲輝学」を各学年に設置した（１単位）。未咲輝学では、地域との協働活動の中に SDGs の内容を盛り込んだカリキュラムを軸として編成し、グローカルな視点を生徒たちに身に付けさせられるよう取り組んでいる。

新たな学校設定科目として「未咲輝学」を設置した背景として、昨年度、探究活動が活発になるにつれ、総合的な学習及び探究の時間の１時間では時間が不足してしまうことになり、放課後や休日に活動を行わざるを得なくなってしまい、生徒・教員ともに負担が増加してしまっているという課題が顕著に見られるようになったことが挙げられる。今年度は、これらの授業を軸としながら、それぞれの教科の授業の中で地域との協働による探究的な学習活動を行うことにより、そのような負担を減少させるとともに、より大きな教育的効果を得ることを目指し、教科ごとに、それぞれの教科の授業の中にどのように地域との協働による探究的な学習活動を行っていくのか、ということを研究した。

家庭科の授業では、昨年に引き続き、地域の人を講師に招き、郷土料理の調理実習を行うという授業を行った。他地域からの入学生はもちろん、町内の生徒たちにおいても郷土料理を作ったことがない、あまり食べたことがないという生徒は多い。地域の伝統を知ることは地域理解、地域愛の醸成につながる。そこで、町内の「はるみグループ」と「四葉グループ」の方々を講師に、３年生の「フードデザイン」で「まるずし」「つと豆腐」などを、２年生の「家庭総合」で「たこめし」「いももち」などを各２時間の実習で調理した。まるずしに地域でよく食べられている太刀魚を使用したり、地域で古くから栽培されているさつま芋を使用した「いももち」を作ったりするなど、この地域特有の素材の選び方や調理法があり、生徒たちも作り

方だけではなく、身近な素材を使うことにも興味を持っていた。実習終了後には、郷土料理のレシピが掲載された冊子をいただき、生徒たちは郷土料理に対して、さらに興味を持つことができていた。参加した生徒たちからは、「作るのが難しかった料理もあるが、とても楽しかった。みんなと協力してできたし、郷土料理を知ることができて良かった。」「たこめしがこの地域の郷土料理だということを初めて知った。家でも冊子に乗っている郷土料理を作りたい。」という感想が上がっていた。また、講師として参加してもらった地域の人たちにも「高校生と一緒に料理ができて楽しかった。」「ぜひ、またこのような機会を作ってほしい」と喜んでもらえた。その後、講師として参加していただいた方から地域伝統の麦みそをいただいた。この麦みそを基に、商品開発班が非常食である簡易みそ汁の素「みそボール」を作ることになった。この授業を通して、郷土料理への興味・関心を高めるだけではなく、地域の人と交流を深めることもできた。料理を通して地域の伝統や文化を知ることができる上、地域に住む異年齢層の人と交流ができる貴重な時間にもなっており、学習効果も非常に高いので、来年度以降もカリキュラムに編成するなどしてぜひ続けていきたい。

国語科の「国語総合」の授業において、『奥の細道』を学習後、愛媛県南予地域を代表する俳人である、芝不器男についての学習を行うとともに、実際に俳句を作り鑑賞するという授業を３時間かけて行った。愛媛県出身の生徒の多くは、小学校や中学校の時に俳句の授業を受けているが、県外出身の生徒にはほとんど俳句の授業を受けていない生徒もいた。また、表現活動に苦手意識を持っている生徒もいるため、俳句の創作に苦労する場面も見られたが、全員が一句創作し、ミニ句会を楽しむことができた。誰がどの俳句を作ったのかが発表されるたびに歓声が上がり、上位に選ばれた生徒もうれしそうであった。芝不器男について学習したことをきっかけに、作成した俳句は実際に「第 67 回不器男忌俳句大会」に投句した。その結果、最優秀賞として１名「制服のチョークの粉や星月夜」、入選として６名の生徒が表彰された。新型コロナウイルス感染症の影響により、会場に集まっての俳句大会及び表彰式は中止となったが、松野町のホームページに選者の先生による句評等を収録した動画がアップロードされ、多くの人に見てもらうことができている。今後も俳句を通した地域の伝統文化、伝統文学の理解に努めるとともに、地域の俳人と連携した活動を取り入れるなど新たな取組も行っていきたい。

家庭科や国語科の授業における研究を通して、教科の内容を学ぶことにとどまらず、外部へと開かれた授業にしていくことは高校側、地域側の双方に利益があるということが分かった。また、各教科で学んだことから興味を広げ、自主的に探究活動に取り組む様子も見られた。生徒の学びの自走性を高めるという点においても、各教科における地域資源を活用した学習活動が効果的であると感じられた。昨年度の取組において、高校生がハブになり、地域に住む人たちをつなげていくという新しい地域づくり、場の提供が行えるのではないかという仮説を立てたが、本年度様々な場面で地域の人と接するたびに、本校を中心とした地域の一体感というものが高まっていると感じた。本年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、調整等で苦労することもあったが、来年度は、高校を核とした新たな地域連携の在り方も念頭に置いた授業作成を行うとともに、各教科における地域との協働による授業の研究を行っていきたい。

来年度は、新型コロナウイルス等の影響により本年度実施できなかった内容も含め、理科の授業で電力関係の人を招いてエネルギーに関する授業を行ったり、国語科や地歴・公民科の授業において、地元郷土館の学芸員の方を招いて地元の歴史に関する授業を行ったりすること、商業科の授業において地元起業家の人に実際の商業活動についての授業を行ってもらったりすることなどを検討しており、各教科・科目における地域との協働による探究的な学びをさらに推進していく予定である。

4　視察研修

(1)　東北視察（防災関係）

①　視察の目的

東日本大震災から 10 年目を迎える現地に赴き、復興の取組みや減災・防災についての知恵や教訓を学ぶ機会とし、本校の防災教育に役立てる。

②　視察の日程

・1 月 28 日（木）

09:00～09:30　石巻市内見学

10:00～12:30　女川駅周辺見学

（佐田岬半島に地形が似ている、産業復興に注力、街づくりに工夫）

13:00～14:00　旧石巻市立大川小学校見学

雄勝漁港見学（高台移転の基礎となる高い防潮堤を建設）

14:30～15:00　南三陸町震災復興記念公園見学（平地をかさ上げした街づくり）

15:30～16:50　気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（旧気仙沼向洋高校）

気仙沼漁港見学（可動式の防潮堤を利用）